# 夭折の詩人が描いた〝青春の自画像〟

〝日本のランボオ〟といわれる、
この夭折の天才詩人がのこした青春詩は、
なお深く強く人の心を打ちつづけている。
短い生涯での
小林秀雄、富永太郎、河上徹太郎、
大岡昇平、草野心平らとの親交と
研鑽の青春の日々——。
その代表詩とエッセイ、書簡、日記で構成した
必読の「中原中也入門」決定版。

# 中原中也

◉わが人生観◉

# 汚れつちまつた悲しみに

大和出版

汚れっちまった悲しみに
―わが人生観―
一九七六年三月三一日　初版発行
一九七九年一二月二五日　一五刷発行
定価　九八〇円
著者　中原中也
編者　吉田凞生
発行者　大和たか
発行所　株式会社大和出版
東京都豊島区要町一～四三
郵便番号　一七一
電話　東京九七四―五五七一
振替　東京　七―一八二七三六
（乱丁・落丁のものはお取替えいたします）
印刷・信毎書籍印刷　製本・誠幸堂
©1976 Shiro Nakahara.　Printed in Japan.
0395-000350-4452

233972
日文 701516889

# 中原中也

◉わが人生観◉

# 汚れつちまつた悲しみに

大和出版

# 目

# 次

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

# I　山羊の歌・在りし日の歌（抄）

## 山羊の歌


サーカス　12
朝の歌　13
臨終　13
帰郷　14
悲しき朝　15
少年時　15
寒い夜の自我像　16
汚れつちまつた悲しみに……　16
羊の歌　17


## 在りし日の歌


含羞（はぢらひ）　20
骨　21
朝鮮女　22
ゆきてかへらぬ　22

一つのメルヘン　23
言葉なき歌　24
冬の長門峡　25
春日狂想　25

## Ⅱ　わが詩観

地上組織　30
詩論　32
生と歌　34
詩に関する話　41
詩と其の伝統　49
芸術論覚え書　58
撫でられた象　73
我が詩観　80

## Ⅲ　批評と友情

富永太郎　―夭折した富永　94
小林秀雄　―小林秀雄小論　98

高橋新吉　―高橋新吉論　100
宮沢賢治　―宮沢賢治全集・宮沢賢治の詩　104
菊岡久利　―菊岡久利著「貧時交」　108
牧野信一　―思い出す牧野信一　110
草野心平　―草野心平詩集「母岩」　115
高森文夫　―詩集　浚渫船　117
萩原朔太郎　―萩原朔太郎評論集――「無からの抗争」　119
辻野久憲　―逝ける辻野君　120

## Ⅳ　青春の手紙

何しろ悲しい話だ……　〈富永太郎宛〉　124
嫌な日が続いて困る困る……　〈正岡忠三郎宛〉　126
金がさっぱりない……　〈小林秀雄宛〉　129
君って人はほんとに分らない……　〈正岡忠三郎宛〉　138
君は僕に真実を語らせる……　〈小林秀雄宛〉　141
子供のように息を吸い……　〈河上徹太郎宛〉　144
打つも果てるも火花の命……　〈小林佐規子宛〉　148
今日はけぶたい睡い日だ……　〈安原喜弘宛〉　151

茂樹の種痘はすみましたか……〈長谷川泰子宛〉 155
恰三の病気また少しわるい由……〈中原　福宛〉 156
月影白き波の上……〈安原喜弘宛〉 158
油一滴、屁もひらず……〈安原喜弘宛〉 160
無能な自分の出来ることの精々を……〈安原喜弘宛〉 164
とにかく、決定的にへと〳〵に……〈安原喜弘宛〉 169
南の空に金星が……〈河上徹太郎宛〉 173
僕は旅情の我鬼です……〈安原喜弘宛〉 174
僕の運勢は晩年はいいそうです……〈中原　福宛〉 177

## V　わが生活

我が生活　184
散歩生活　192
私の事　198
日記抄　一九二七年　202
一九三四年　209
一九三五年　214
一九三六年　224

一九三七年（千葉寺雑記）　232
解説　吉田凞生　238
年譜　吉田凞生編　246

# 汚れっちまった悲しみに

## ——わが人生観

中原中也

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

# I

# 山羊の歌・在りし日の歌（抄）

# 山羊の歌

## サーカス

幾時代かがありまして
　茶色い戦争ありました
幾時代かがありまして
　冬は疾風吹きました
幾時代かがありまして
　今夜此処での一と殷盛り
　今夜此処での一と殷盛り

サーカス小屋は高い梁
　そこに一つのブランコだ
見えるともないブランコだ

頭倒さに手を垂れて
　汚れ木綿の屋蓋のもと
ゆあーん ゆよーん ゆやゆよん

それの近くの白い灯が
　安値いリボンと息を吐き

観客様はみな鰯

咽喉が鳴ります牡蠣殻と
ゆあーん ゆよーん ゆやゆよん

屋外は真ッ闇 闇の闇
夜は劫々と更けまする
落下傘奴のノスタルヂアと
ゆあーん ゆよーん ゆやゆよん

## 朝の歌

天井に 朱きいろいで
戸の隙を 洩れ入る光、
鄙びたる 軍楽の憶ひ
手にてなす なにごともなし。

小鳥らの うたはきこえず
空は今日 はなだ色らし、

倦んじてし 人のこころを
諫めする なにものもなし。

樹脂の香に 朝は悩まし
うしなひし さまざまのゆめ、
森並は 風に鳴るかな

ひろごりて たひらかの空、
土手づたひ きえてゆくかな
うつくしき さまざまの夢。

## 臨終

秋空は鈍色にして
黒馬の瞳のひかり
水涸れて落つる百合花
あゝ こころうつろなるかな

神もなくしるべもなくて
窓近く婦の逝きぬ
　白き空盲ひてありて
　白き風冷たくありぬ

窓際に髪を洗へば
その腕の優しくありぬ
　朝の日は濡れてありぬ
　水の音したたりてゐぬ

町々はさやぎてありぬ
子等の声もつれてありぬ
　しかはあれ　この魂はいかにとなるか？
　うすらぎて　空となるか？

## 帰郷

柱も庭も乾いてゐる
今日は好い天気だ
　縁の下では蜘蛛の巣が
　心細さうに揺れてゐる

山では枯木も息を吐く
あゝ今日は好い天気だ
　路傍の草影が
　あどけない愁みをする

これが私の故里だ
さやかに風も吹いてゐる
　心置なく泣かれよと
　年増婦の低い声もする

あゝ　おまへはなにをして来たのだと……
吹き来る風が私に云ふ

## 悲しき朝

河瀬の音が山に来る、
春の光は、石のやうだ。
筧の水は、物語る
白髪の嫗にさも肖てる。

雲母の口して歌つたよ、
背ろに倒れ、歌つたよ、
心は涸れて皺枯れて、
巌の上の、綱渡り。
知れざる炎、空にゆき！

響の雨は、濡れ冠る！

……

われかにかくに手を拍く……

## 少年時

黝い石に夏の日が照りつけ、
庭の地面が、朱色に睡つてゐた。

地平の果に蒸気が立つて、
世の亡ぶ、兆のやうだつた。

麦田には風が低く打ち、
おぼろで、灰色だつた。

翔びゆく雲の落とす影のやうに、
田の面を過ぎる、昔の巨人の姿——
夏の日の午過ぎ時刻



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com